

その日常に感謝を込めて

横浜市立義務教育学校西金沢学園中学部 9年 盛田 海

毎日学校に行くことができ、部活動に打ち込み、学習塾で学ぶことができる。私たちは、このように自分の為に費やせる時間が一日の内のほとんどを占める。そんな自由な日常の土台は税金によって築かれているのだ。「税」の存在をどこか遠いもののように感じるのは、私たちが税について考える機会が少なく興味関心が薄いことで、身近に潜むあらゆる「税」に気付かないからだと思う。

「もし税金を誰も払わなくなったら」そう考えたことはあるだろうか。世界には、実際に教育面にあまり税金が回されていない国がある。その一つがネパールだ。私は、「ヒマラヤに学校をつくる」という本を読んだことがある。この本は、二十二歳でネパールに渡った著者が貧困を目の当たりにし、子供達のために学校設立に尽力する二十二年間の軌跡を描いた物語だ。私はこの本を読み、当時のネパールの子供達の生活に衝撃を受けた。日もまだ昇らぬ薄暗いほどの早朝に起きて家の仕事を手伝い、それから何時間も山道を歩き学校に通う。しかし、学校でも慢性的な教師や施設不足により、十分な教育を受けられない。更に下校後も家族を手伝う。学校の建設は募金によって集められた資金で賄われ、そこに税金は使われないため、教育の必要性も伝わらず環境を整えるだけでもかなり厳しい。現在のネパールでは、就学前教育、初等教育、前期中等教育、中期中等教育、そして後期中等教育という教育システムが成り立っている。また、初等教育の五年間のみ無償で授業を受けられるため、入学率はとて高くなった。しかし、いずれも義務教育ではなく、貧困などの理由で卒業できるのは六割強にとどまり進学率も低い。ジェンダー格差も解消されていないのが現実だ。このようなネパールの状況から、社会全体で教育を推進しその必要性への理解を広めるためにも、税金で多くの子供達が新たな扉を開くきっかけにするべきだと思う。

私は今は税金を払う側ではないが、見知らぬ誰かが納めてくれた税金によって自由に暮らすことができる。何の障害もなく学べることは、とても幸せな事だと心から思う。これも、税に関する制度が整った日本という恵まれた国だからこそだ。私は将来、小学校や国語科の教師として教育に関わりたい。その時には、全力で学び遊べる当たり前の日常は誰かに支えられて作られていること、その優しさは自分の近くに溢れていることを伝えたいと思う。教科書も、机も、椅子も、図書室の本も、全て未来を担う私たちへ向けられた期待が込められている。私も大人になったら、誰かに支えられてきたように、今度は私が社会を支える番だという自覚をもって未来へ投資をするように税金をしっかりと納めたい。お互いに助け合うようにして広がった輪が、これからも小さな幸せにつながることを願っている。